

# ARC-AGI-2と知財業務の未来

流動的知性がもたらす「特許実務」の革命的变化

2026年 知的財産戦略レポート



## 知識から推論へ

従来のLLMは暗記に依存。ARC-AGI-2は「流動的知性」（未知の問題解決）を測定。



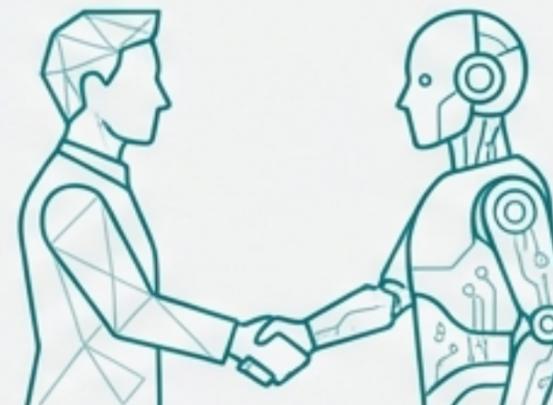
## 人間超えの指標

トップモデル (Johan Land) : 72.9%  
人間平均 : ~60%



## 実務への直結

ハイスコアは「クレーム起案」や「新規性判断」の精度と直接相関する。



## 2026年の戦略

AIを単なるツールから、監督下で自律動作する「エージェント」へ。

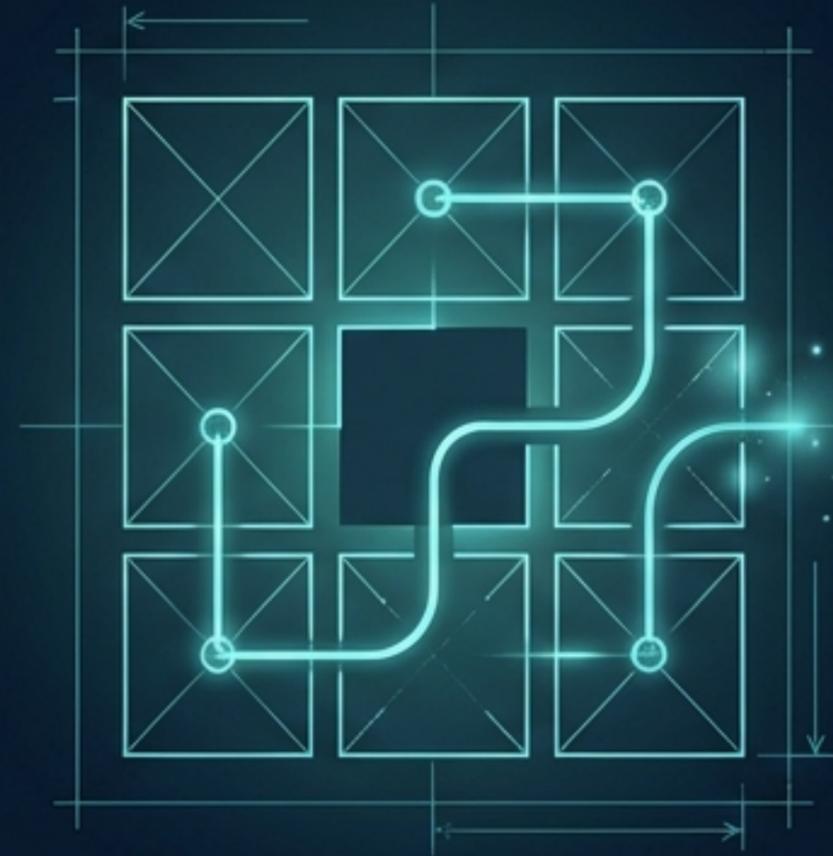
# なぜ従来のLLMは知財実務で失敗するのか？

## 結晶性知性 (LLM)



知識の暗記・検索  
ARC-AGI-2 スコア: 0%

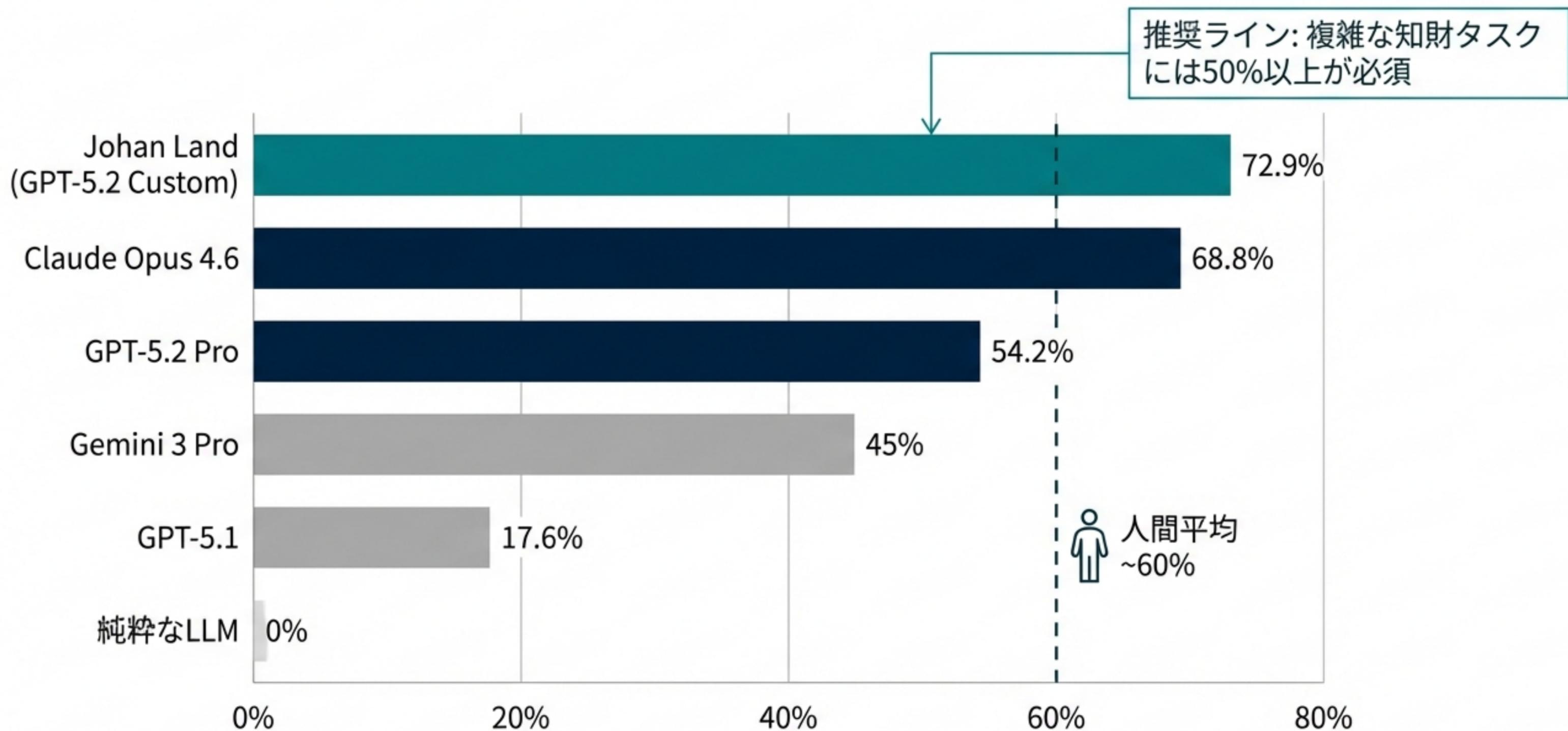
## 流動的知性 (ARC-AGI-2)



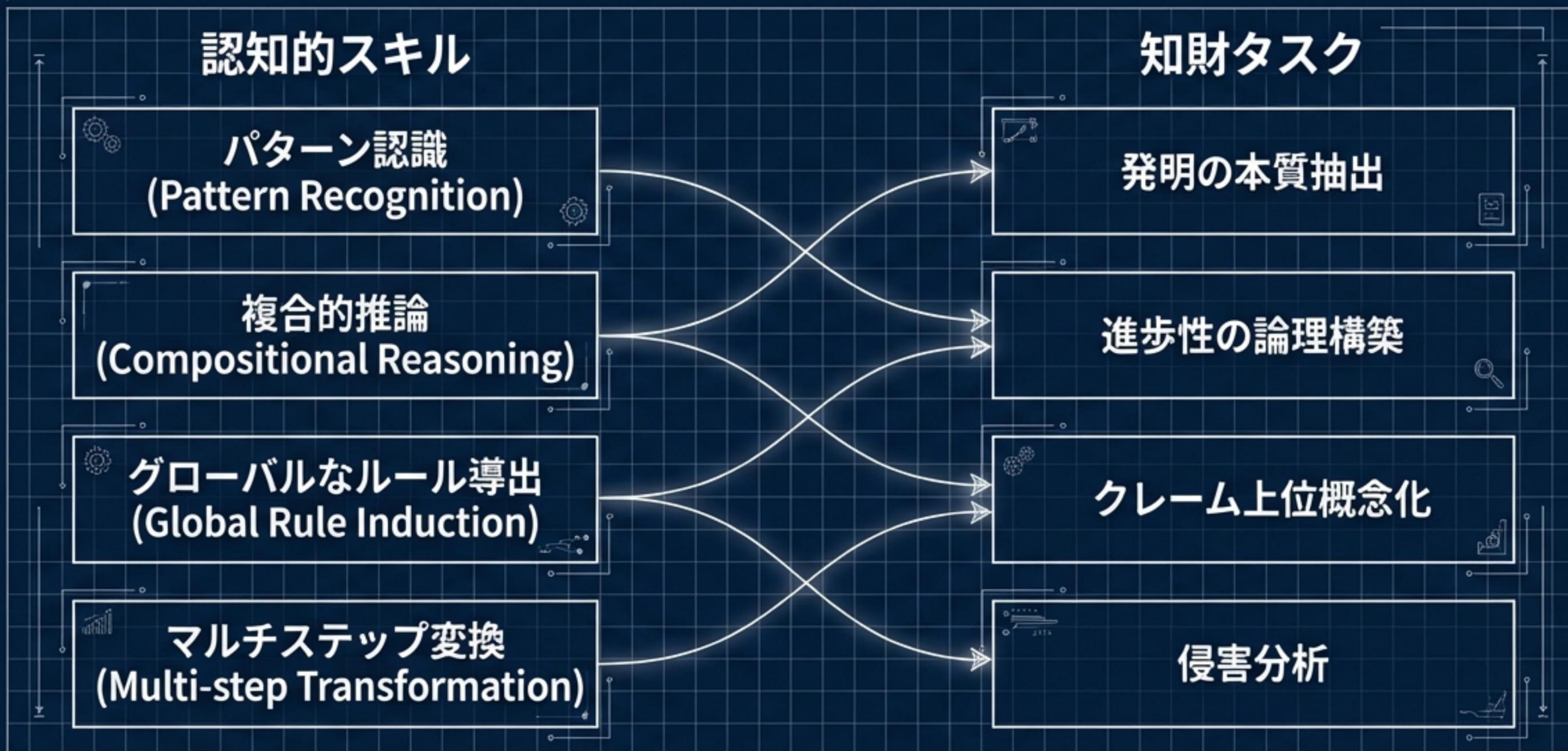
未知の状況での推論  
設計: François Chollet

ARC-AGI-2は、事前の知識なしで新しい規則性を発見する能力を測定する。

# 2026年2月：推論能力リーダーボード

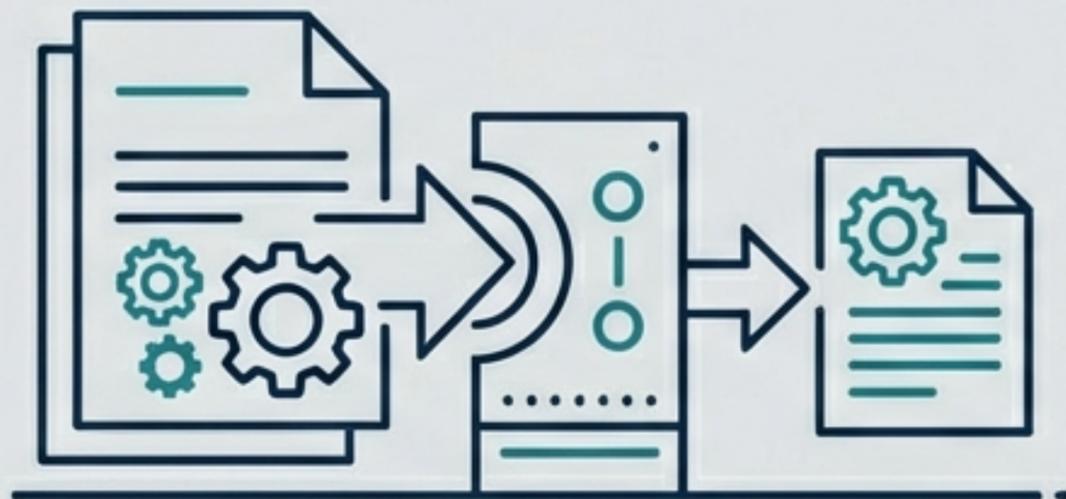


# 認知的スキルと知財タスクの相関



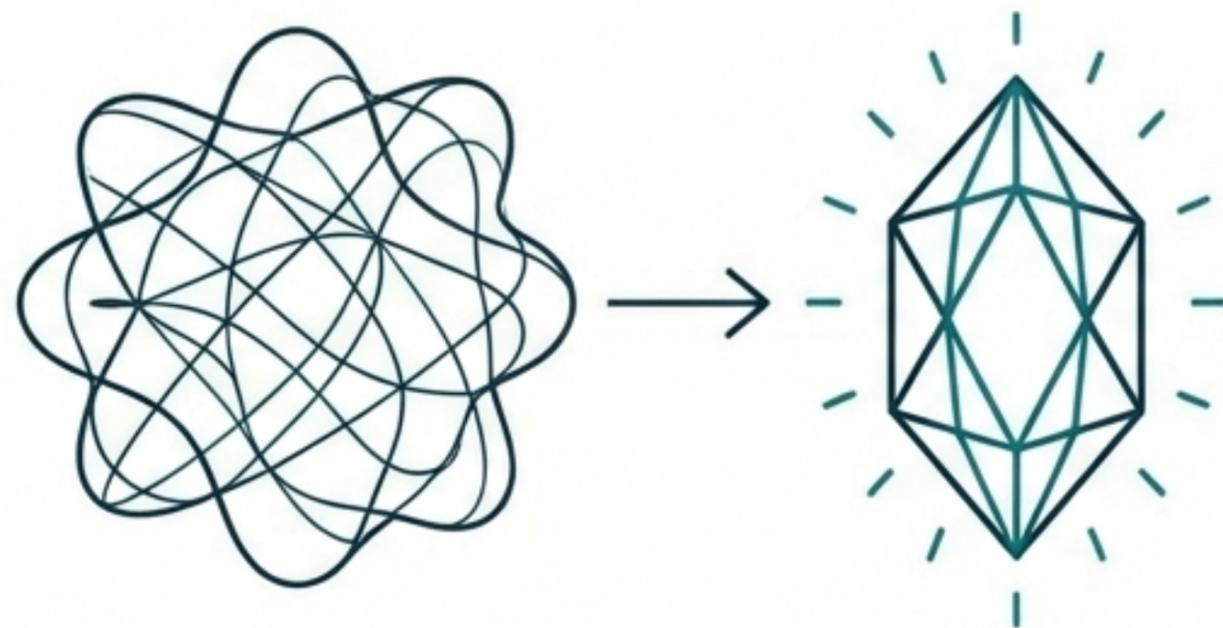
# ケーススタディ 1: 発明の本質抽出

スコア < 5% (言い換え)



発明者の説明をそのまま繰り返す。  
「本質」と「実施例」の区別がつかない。

スコア > 50% (抽象化)

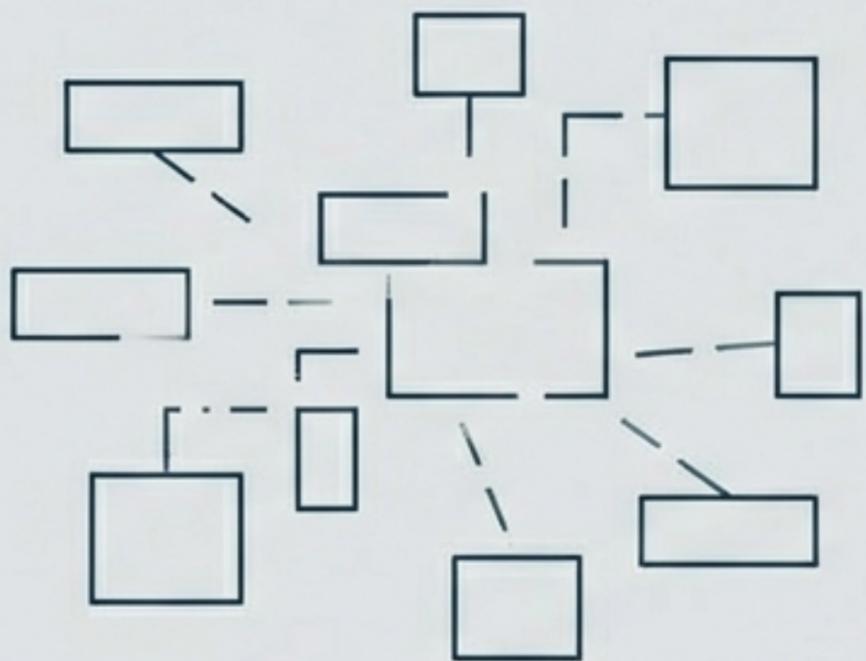


具体的な実施形態から抽象的なルールを導出。  
技術的思想 (アイデア) の真の理解。

ARC-AGI-2の「共通ルール発見」タスクは、発明抽出と同じ認知プロセスである。

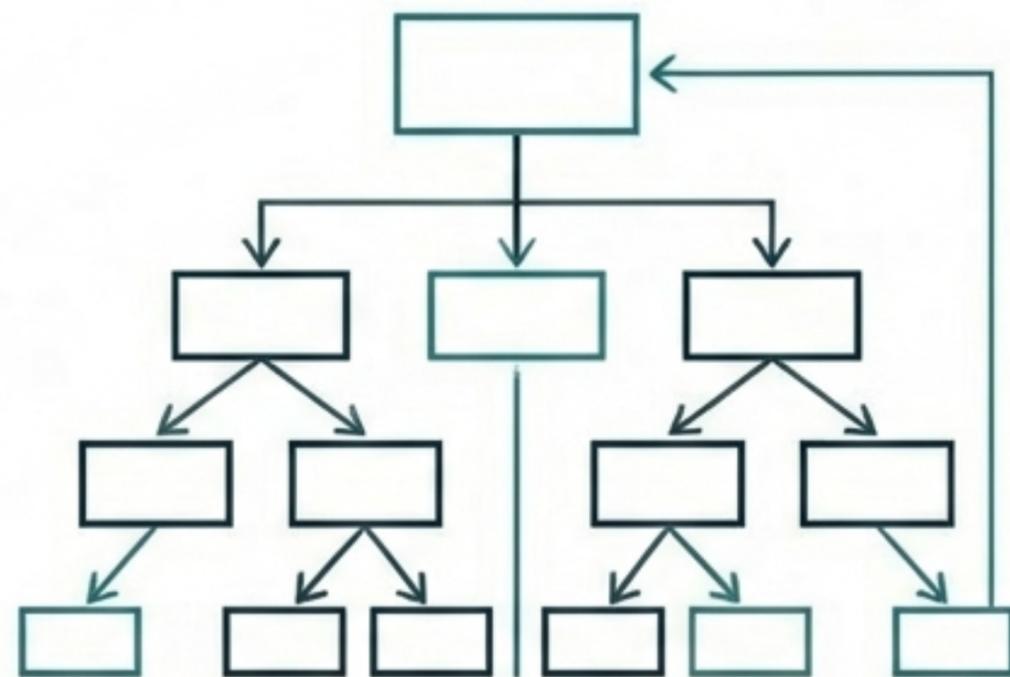
# ケーススタディ 2: 特許クレーム起案

## 断片的・限定的



クレームが狭すぎる。  
従属項の論理的なつながり（リンケージ）  
が欠如。

## 階層的・論理的



適切な上位概念化。  
独立項と従属項の技術的一貫性を維持。

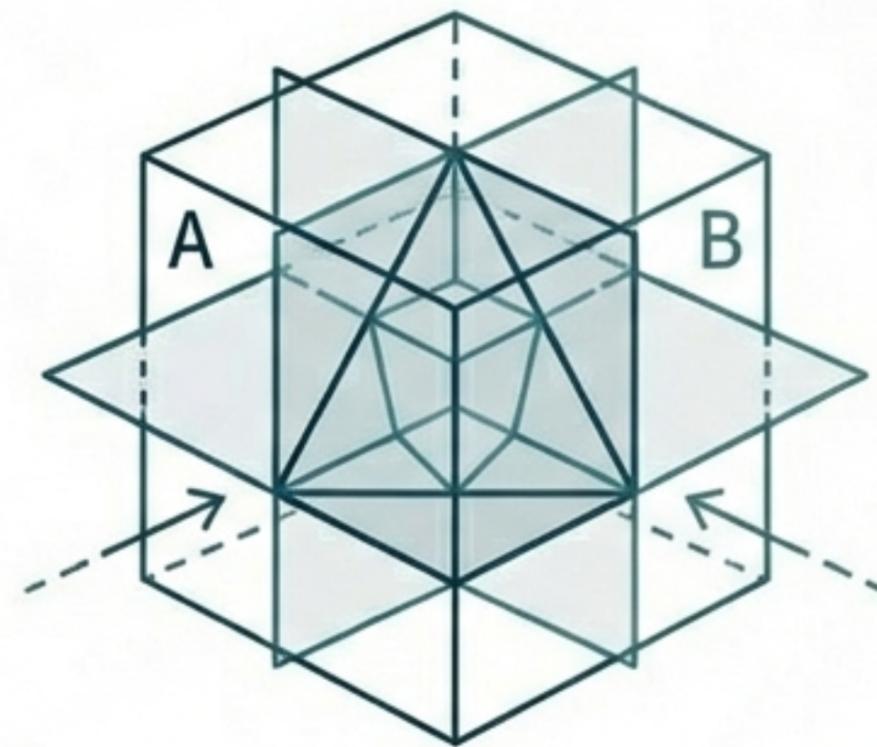
# ケーススタディ 3: 新規性・進歩性判断

## キーワードマッチング



意味的な差異を見逃す。  
「文献Aと文献Bの組み合わせ」のような  
複合論理が扱えない。

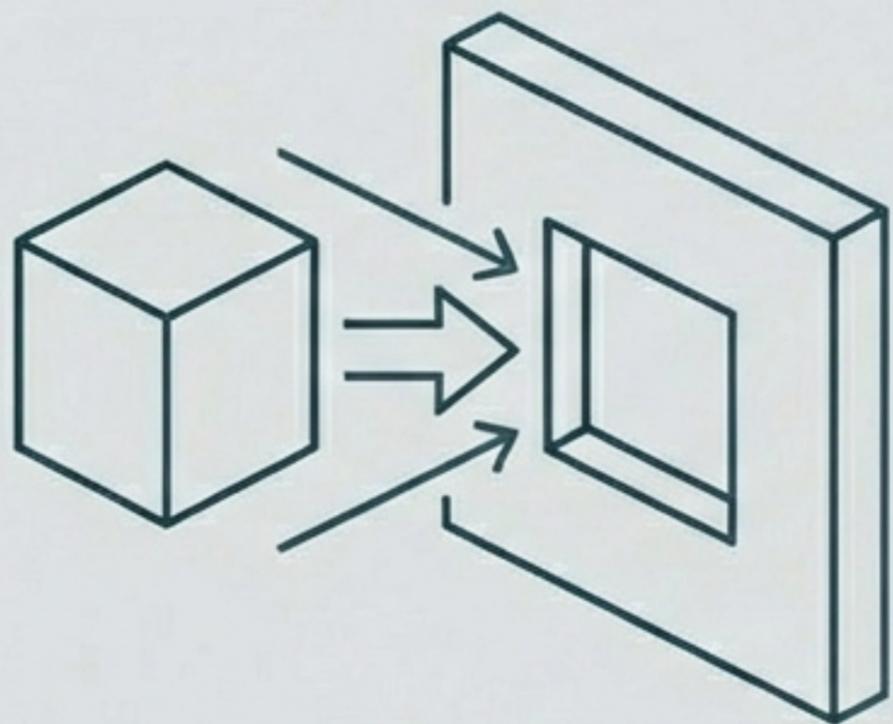
## 多次元分析 (Composite Reasoning)



PatentMindフレームワーク等の活用。  
複数の先行技術を論理的に組み合わせて  
進歩性を否定/肯定する。

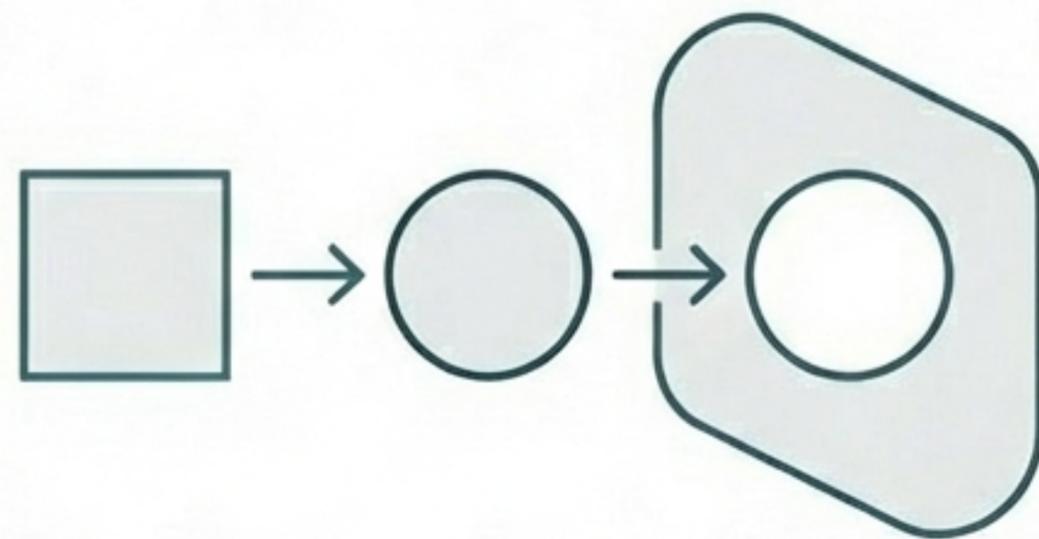
# ケーススタディ 4: 侵害分析と均等論

## 字義解釈のみ



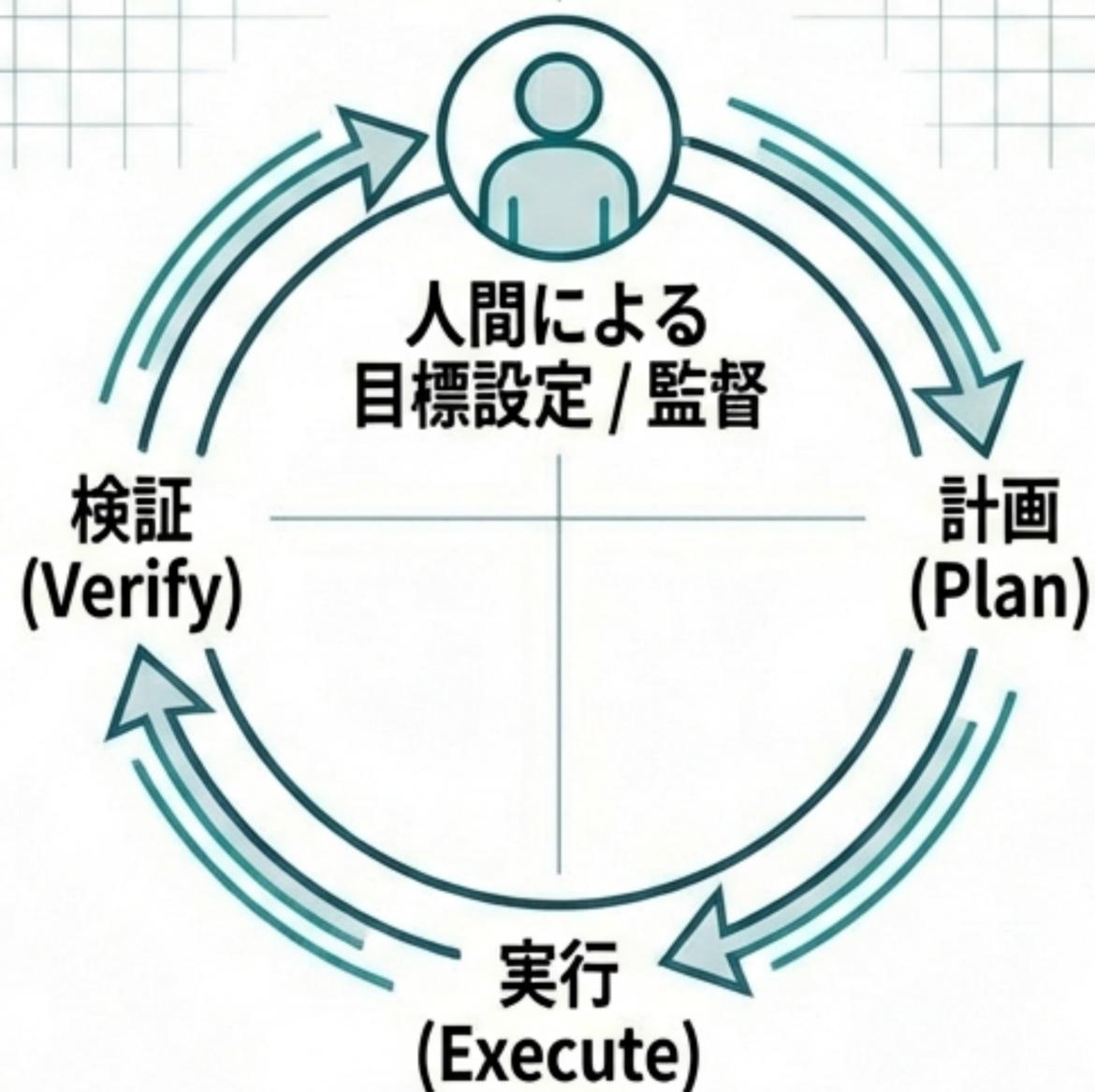
文言通りの解釈に留まる。  
機能的な均等物を見逃すリスク。

## 機能・方法・結果 (F/W/R)



「変換ルール」の適用能力。  
クラウド上の分散システムなど、  
複雑な侵害シナリオを分析可能。

# 2026年：エージェントティック・ワークフローの時代



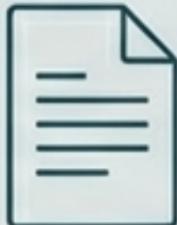
第1の波: 生成AI  
= 補助ツール (Assistant)

第2の波: エージェントAI  
= パートナー (Partner)

高度な推論能力(High ARC Score)を持つモデルだけが、自律エージェントとして信頼できる。

# コストと精度の最適化戦略

推論コスト (Low → High)

  
**定型・翻訳タスク**  
標準モデル (GPT-5.2 Pro / Gemini)  
コスト重視

  
**戦略・推論タスク (クレーム/分析)**  
ARC-AGI-2 リーダー (Johan Land / Opus 4.6)  
精度重視

タスクの複雑性 (Low → High)

# IP専門家への推奨アクション



## ベンチマーク導入

ARC-AGI-2スコアを、リーガルテック導入時の調達基準にする。



## ハイブリッド設計

トップモデルでも精度は~70%。残りの30%を埋める「Human-in-the-loop」プロセスを構築する。



## 透明性の確保

法的リスクを低減するため、AIの推論過程（Graph-based explanations）の開示を求める。

# 「補助」から「パートナー」へ

流動的知性が、AIを真の知財専門家へと変える。

「2026年、知財実務は新たな知性と共に進化する。」